

アメリカ中学校家庭科教科書から見た 「家族関係」の一考察（第1報）

瀧本 麻衣*・入江 和夫

A Study of “Family Relation” in the American Textbook of Homemaking Education
(Part I)

Mai TAKIMOTO & Kazuo IRIE

(Received October 1, 2004)

I はじめに

新聞やマスメディアで、連日のように報道される子どもたちの事件は、とりわけ中学校期を中心に起こり、年々社会問題化している。文部科学省「完全学校週5日制の実施に伴う事業の実施・子どもたちの参加状況に関する調査」¹⁾、東京都福祉局子ども家庭部企画課「最近の思春期児童の行動に関する専門家会議報告書」²⁾、内閣府国民生活局総務課「国民生活白書」³⁾、文部科学省「生徒指導上の諸問題の現状について」⁴⁾、等の中にも問題行動を引き起こす時期が中学生期に集中していると報告されている。これらをキーワード化すると「問題行動」「キレる子」「人との触れ合い・コミュニケーション」「家族」と集約できる。子どもたちの起こす問題の要因は、家庭の中にあると考えられる。学校教育の中で家庭を扱う教科として家庭科がある。

家庭科は戦後、新しく誕生した教科である。当時、我が国の教育改革を管理・指導したアメリカの教育使節団は戦前の家事・裁縫教育を否定し、「技能教科ではない」、「女子のみにおこなう教科ではない」、「家事と裁縫を合わせた教科ではない」を新設条件とし、「民主的な家庭建設を直接の課題とする教科」として家庭科が誕生した。昭和22年学習指導要領の「はじめのことば」⁵⁾では、「家庭科の教科目の中に家族関係の研究は必要欠くべからざる課程とすべき」とあり、家族関係が中心の教科であった。戦後教育の見直しから、昭和33年の学習指導要領に「家族関係」が削除され、平成10年改訂まで続いた。この間に、上述した家庭内の問題が頻繁に起きている。中学生は子どもと大人の間段階の思春期にあり、自立に伴う不安、友人関係、家族との摩擦などの悩みに直面している。平成10年の改訂で文部科学省は「心の教育」⁶⁾の充実を図っている。今回の中学校学習指導要領〔家庭分野〕では、A、Bの2領域になり、B領域では家族と家庭生活の中で「家族関係」が扱われるようになった。

そこで、我々は、40年ぶりに復活した家族関係を扱う日本の「家庭科」と思春期の発達を扱う「保健体育」の教科書について、中学生はどのような問題に悩み、それをどのように解決すべきなのかという視点から、上記のキーワードを中心にして、アメリカ教科書を基準にしなが

キーワード：家族関係、家庭科教育、中学校

* 山口大学大学院教育学研究科

ら日本の「家庭科」・「保健体育」の内容を分析し、今後の日本の中学校家庭科教科書はどうあるべきかについて一考した。

Ⅱ 方 法

1. 分析した教科書：Louise A.Liddell & Yvonne S.Gentzler 「Building Life Skills」⁷⁾、東京書籍「新しい技術・家庭（家庭分野）」⁸⁾（以下KTとする）、開隆堂「技術・家庭（家庭分野）」⁹⁾（以下KKとする）、大日本図書「中学校保健体育」¹⁰⁾（以下HDとする）、東京書籍「新しい保健体育」¹¹⁾（以下HTとする）
2. 分析の視点：中学生の悩みとその解決方法

Ⅲ 結果と考察

1. 日米家庭科教科書の精神的機能と生活保持機能のページ数の比較

平成10年6月の中央教育審議会「新しい時代を拓く心を育てるために」一次世代を育てる心を失う危機―「幼児期からの心の教育の在り方について」の答申¹²⁾で、家庭が持つ機能を精神的機能と生活保持機能に分類している。そこで、アメリカ家庭科教科書と日本家庭科教科書の単元の内容をこれらの機能に分類し、そのページ数の割合を表1に示した。

表1 アメリカ家庭科教科書⁷⁾と日本家庭科教科書^{8) 9)}の各分野のページ数

	アメリカ中学校 家庭科教科書 単元	% (ページ数)	日本中学校 家庭科教科書 (KT)	% (ページ数)	日本中学校 家庭科教科書 (KK)	% (ページ数)
精神的機能	自分自身について学ぼう	13.4 (68)	家族関係	6.8 (14)	家族関係	8.3 (16)
	人生設計	6.9 (35)	消費生活・環境	14.6 (30)	消費生活・環境	14.6 (28)
	子どもを理解する	13 (66)	保育	18.4 (38)	保育	18.7 (36)
	成功を収める	10.1 (51)		0		0
	小 計	43.4 (220)	小 計	39.8 (82)	小 計	41.6 (80)
生活保持機能	健康と栄養、台所で働く	32 (162)	食生活	31.1 (64)	食生活	27.1 (52)
	あなたが着る服	18.1 (92)	衣生活	20.4 (42)	衣生活	21.9 (42)
	あなたが家と呼ぶ場所	6.5 (33)	住生活	8.7 (18)	住生活	9.4 (18)
	小 計	56.6 (287)	小 計	60.2 (124)	小 計	58.4 (112)
総ページ		100 (507)		100 (206)		100 (192)

アメリカ家庭科教科書において、精神的機能に分類できる単元は、「自分自身について学ぼう」「人生設計」「子どもを理解する」「成功を収める」である。生活保持機能に分類できる単元は、「健康と栄養」「台所で働く」「あなたが着る服」「あなたが家と呼ぶ場所」である。

精神的機能の全単元の割合はアメリカで43.4%、日本KTで39.8%、日本KKで41.6%であり、アメリカが精神的機能の割合は多かった。次に、生活保持機能の全単元の割合はアメリカで56.6%、日本KTで60.2%、日本KKで58.4%であり、日本が生活保持機能の割合は多かった。アメリカは人間関係である精神的機能を重要視していると考えられる。

2. 日米の教科書の精神的機能の内容の比較

米教科書の単元「自分自身について学ぼう」について、日本の教科書と比較していく。この単元は1)「成長と変化」2)「あなたの個性」3)「直面している変化」4)「他の人とのコ

コミュニケーション」5)「家族」6)「友達」の章から構成されているが、第1報では、1)～3)までを取り上げる。

1) 第一章「成長と変化」¹³⁾について

この章は大項目(1)「成長と発達」(2)「責任を受容すること」(3)「自立すること」からなり、これらはそれぞれ小項目がある。その内容について、中学生の悩み、その解決方法を視点にして抽出し、これに該当する内容を日本の家庭科教科書^{8) 9)}と保健体育教科書^{10) 11)}から抽出し、記号(例 HD-p36)と内容を表2に示した。

表2 アメリカ教科書 第一章「成長と変化」と日本教科書の比較

	章	大項目	小項目	中学生の悩み、その解決方法	日本教科書 該当項目
アメリカ	第1章 「成長 と変化」	成長と 発達	身体 の変化	身体の変化は体型に影響を与え、大人の容姿や肉体に近づくことである。変化は自分が親になるための体の内側にもまた生じている。このように急激に変化するので自分自身のケアが重要である。それは十分に栄養のある食物の摂取と睡眠が基本である。その他に、有害な効果として喫煙、アルコール、薬物乱用がある。成長には個人差があるので、成長を不安に感じる必要はないし、この感情は正常である。	HD-p36 HT-p36
			知能の 変化	知能は8歳で大人の80%が発達している。13～15歳の間に理性や問題解決能力が発達する。十代は具体的な事実を越えて考えることができる。問題を考えることが容易になる。ある問題について両面から聞くことに興味を感じる。集めた事実に基づいてより知的な決定をすることができる。これらの新しい能力で、他者が理解できるように自分の考えを表現できるようになる。あなたは他者の見解がよりわかるようになる。これらのスキルは自分の人生の友人や大人との会話の手助けに役立つ。	HD-p48 HT-p44
			感情の 変化	感情の変化は思春期に以前より激しくなるかもしれない。例えば、親友があなたの感情で傷ついたり怒ったりするかもしれない。あなたはどのようにやって仲直りをすればいいかと悩んだりする。これらの不安は誰にでもある。間違っているのではなく発達していくにつれ、あなたの感情をどのように処理するかを学んでいくことになる。	HD-p49 HT-p45
			社会性 の変化	社会性の変化は他の人とどうやって関わるかということである。家族や友達やクラスメートや先生などすべての人々との関係は、あなたの社会的発達に影響を与える。あなたはもはや子どもではなく、大人でもない、今まで以上に仲間が大切になる。仲間とは同じ年代であり、コミュニケーションを学ぶことや仲間と上手につきあうことは重要な発達のタスクである。もう一つの社会発達はあなたのそれぞれの役割を果たす方法を学ぶことである。役割とは求められる振る舞いの一つである。また、大人の役割として期待される振る舞いを決定することも発達のタスクでもある。リラックスすることや自分らしくいることを忘れてはいけない。	HD-p50 HT-p46
		責任を 受容す ること	自身 の責任 を果た すこと	自身の責任とはあなたの行動を決定することやそれを受容することである。多くの人や出来事が影響を及ぼすけれども、あなたは結局は自分が誰なのか、あなたがなるだろう人は誰なのかという責任を持っている。小さい頃は家族が責任を果たしてきてくれたが今は自分で責任を果たさなくてはならない。あなたが決定を下したときに、その決定があなたや他の人にどのような影響を与えるかを考えなければならない。(例えば、セックスをする事での妊娠や性感染症などのリスクを背負うこと等) これらの因果関係は家族や友達や地域に大きく影響を与える。これらの因果関係を考えることは性的な振る舞いを考える上での責任ある決定することに役立つ。	なし
		家庭に おいて の責任	家での責任は家族の一員として持っているものである。あなたが与えられた責任の量は、あなたが既に持っている責任をどうにか上手く処理することによって決定される。例えば、宿題をきちんとすることで、両親から自分自身のスケジュールを計画する責任を任せられる。	なし	
		学校に おいて の責任	学校での責任は毎日遅刻せず時間通りに出席することや宿題を終えることやクラスの計画に参加することである。クラスメートを助けること(例えば、一緒に宿題をすることやクラスのプロジェクトに参加すること)は責任感を示していることになる。学校で責任を果たすことは将来の責任を果たす準備をすることになる。	なし	
	自立す ること	自立することは思春期の目標の一つである。自立を成し遂げた人は自分自身の行動に責任が持てる人である。思春期には、友達と経験を分かち合うことは社会的に適応した振る舞いを学ぶことに役立つ。自立する準備ができたことを大人や両親に示したくなる。これをする一つの方法が今まで以上の責任を引き受けることである。責任を表す方法として一つ目は夏休みの仕事を時間通りに来て、一生懸命することである。二つ目はお金の管理をきちんとすることである。自立することは更に多くの自由を手に入れることになる。あなたや友達は自身で決定することを心待ちにしているかもしれない。あなたがさらに責任を果たすにつれて、素晴らしい自立がいつか来る。	なし		
日本家 庭科K T	なし	なし	なし	なし	なし
日本家 庭科K K	なし	なし	なし	なし	なし

日本保健体育HD	第1章「心身の発達と心の健康」	体の働きの発達	体の発育	第二発育急進期は、普通女子の方が男子よりも2才くらい早く始まる。しかし、始まる時期や伸び方には個人差があり、一人ひとり違っている。そのため、私たちの年齢では体の大きさにも色々違いが見られる。	HD-p36
		心の働きの発達	知能の発達	知能は、脳の発育とともに、15才頃までにめざましく発達し、その後も20才くらいまで緩やかに発達し、40才頃から少しずつ衰え始める。能力の発達には個人差が大きく、どういう能力が優れているとか、どの時期に発揮されるかということは、人によって違う。	HD-p48
			感情の発達	感情とは、物事の好き嫌いを感じたり、喜んだり、悲しんだりする心の動きのことである。3才頃の子どもは感情を抑える力が十分ではない。中学生の頃には、むやみに感情を表すことも減り、より複雑な感情の表し方と感じ方をするようになる。感情の発達には個人差がある。同じような体験をしても、その感じ方や表し方は人によって大きく異なる。	HD-p49
			社会性の発達	社会性とは人との関わり方やその能力のことである。中学生の頃の社会性の発達にとって、友達や仲間の果たす役割はとても重要になる。例えば、友達と協力したり、ぶつかり合う経験を通して、約束を守ることや互いに譲り合うこと、自分の振る舞いや気持ちの表し方に気を配ることなどを学ぶのである。また、人と関わることは、自分自身を知る上でも重要なことである。家庭や学校や地域社会の中で、助け合い望ましい社会生活を送って行くためにも、他の人の考えや感情を理解できるようにすることが大切である。	HD-p50
日本保健体育HT	第1章「心身の発達と心の健康」	体の発育・発達	思春期の発育・発達	思春期は子どもから大人への移行期にあたる。発育促進期は女子の方が男子よりも平均で2年ほど早く始まり、そして発育の完成も女子の方がやや早くなっている。体の発育・発達の程度や速さには、個人差・男女差があることも理解しておくことが大切である。	HT-p36
		精神の発達と自己形成	知的機能の発達	知的機能とは理解、記憶、ことば、思考、判断などの心の働きである。心の働きは脳のいろいろな働きに基づいている。	HT-p44
			いろいろな感情表現	感情と意志は、いろいろな行動を起こすもとになる。喜怒哀楽などの感情表現の仕方は、特に発達段階によって、その内容や質が異なる。いろいろな生活経験を積むうちに、いろいろな感情が入り交じり、感情をすぐに行動に表さなくなる。中学生期に情意機能を発達させるには4つの方法がある。1) 自分の複雑な気持ちに気づく。2) 他の人の気持ちを理解できるようにする。3) 自分の感情や意志を上手く人に伝えられるようにする。4) 怒りや悲しみなどの感情をコントロールして、すぐに行動に表さなくすむようにする。	HT-p45
			個性と社会性	物事の感じ方、考え方、行動の仕方、生活習慣などの自分らしさ(個性)は、一人一人違う。その中には、生まれつきのことやひとりでの身に付いたものもある。しかし、周りの人からの影響を受けたり、生活の中で経験してから身に付いたこともたくさんある。多くの人との関わりや、いろいろな生活経験によって、一人一人の個性が作り上げられていく。このようにして、人とのつき合い方や自分と社会との関わり方を学ぶうちに、社会生活を送るのに必要な態度と行動のしかたが身についていく。これを社会性という。	HT-p46

(1) 大項目「成長と発達」

大項目「成長と発達」は「身体の変化」「知能の変化」「感情の変化」「社会性の変化」の小項目から成り、順次比較分析していく。

小項目「身体の変化」では「身体的変化は急激に起こるので、自分自身のケアが重要である」としている。中学生は身体の変化による不安が生じる時期であることから、その解決方法として友人も同じように感じていると解説することで不安を和らげている。写真1-3¹³⁾は「同年の友達は違う速度で発達し得る」と説明され、身体の変化の違いがこの時期の特徴であることを示している。日本の家庭科にはこのような記載はなく、保健体育にあった。保健体育HDの第1章「心身の発達と心の健康」には「体の発育には個人差があり、一人一人違っている」とあった。また、保健体育HTの第1章「心身の発達と心の健康」には「個人差や男女差があることを理解することが大切である」と記載されていた。中学生の時期とは自分について敏感に悩む時期である。日本の家庭科において米国のような記述があれば、一人だけの問題ではないと捉えることができ、孤立化を防ぐことができると考えられる。

小項目「知能の変化」では「このような発達が友人や大人のコミュニケーションの手助けになる」と記載され、知能が発達すること＝問題解決能力の向上と捉え、そのことが他者の見解をより理解できることとなると説明され、人間関係づくりの視点が感じられる。日本の家庭科にはこのような記載はなく、保健体育にあった。保健体育HDでは脳の発達と年齢について書かれ、保健体育HTでは「心の働きが脳の働きに基づいている」と書かれていた。日本の教科書は知能の発達が定義的に説明されただけであり、アメリカのように問題解決能力の向上、他

者理解に役立つと説明された方が中学生に理解しやすいと考えられる。

小項目「感情の変化」では感情が揺れ動くことは正常であると述べている。それはネガティブなものやポジティブなものに分類され、前者ではコントロールしにくいもので、ねたみや怒りであると説明されている。感情の変化は中学生にとって悩みとなる。ここには、具体的解決方法が書かれ、それは「時間をあけること」、「送る必要はない友人向けの手紙を書くこと」などである。「親友とけんかしたときにどうやって元に戻ろうかと不安に思うかもしれない」とあり、親友が自分にとって、どのような存在であるかについて写真1-5¹³⁾では「親友はお互いの気分を理解し、お互いに許すことができる」と説明されている。解決方法として同年齢の友達である必要はなく、写真1-6¹³⁾で「異年齢の友達は、感情をコントロールするために必要な助言を与えてくれる」と説明されている。日本の家庭科KT・KKには幼児の情緒の発達はあるものの、中学生についてはなかった。保健体育HD・HTでは感情の揺れについて正常だとの記述はなかった。また保健体育HTでは、情意機能を発達させる4つの方法が示されていたが、自分で処理することとして書かれていた。これでは上手く処理できない場合が生じる。アメリカのように友人など他者に相談することが解決方法の1つであることを学習させる必要がある。

小項目「社会性の変化」では「中学生に起こる多くの変化は社会性の変化であり、それは他者との関係である」と述べ、「中学生とは子どもでもなく、大人としていつも扱うとは限らない時期であり、このため同年齢の仲間とうまくやっていくことが重要である」と説明されている。ここには子どもでもなく大人でもない年齢だからこそ、孤立化していく可能性があり、そうならないために同じ境遇の仲間＝同年齢の仲間がいれば、孤立化が回避され、仲間を持つ重要性が指摘されている。非常に説得力がある内容である。日本の家庭科には記載はない。保健教科書HDでは小項目「社会性の発達」の中で、「中学生期になると友達や仲間の果たす役割が重要であり、友達との協力やぶつかり合う経験を通して社会性が発達する」と書かれている。ここではアメリカのように子どもでもなく大人でもない同年齢の友人を仲間として捉えさせることが重要である。

(2) 大項目「責任を受容すること」

大項目「責任を受容すること」は「自分自身に責任があること」「家庭での責任」「学校での責任」の小項目から成り、順次比較していく。

小項目「自分自身に責任があること」では「小さい頃は家族が責任を果たしてきてくれたが今は自分で責任を果たさなくてはならない」とある。中学生は責任について悩む時期である。ここでは、具体的にセックスを例に挙げている。セックスをすることで妊娠、性病の移行を知っていなければならないし、このことは自分ばかりでなく相手、家族、友人、地域にも影響を与えている。日本の家庭科KT・KKや保健体育HD・HTに中学生の責任に関する記述は全くなかった。子どもであれば、責任の比重が薄い、年齢を重ねるほどそれは重くなる。また、このことを自覚しつつ成長していくことが、中学生時期には重要である。このように子どもから中学生への変化と責任の重さについての具体例があれば、中学生にとって理解しやすい内容となる。

小項目「家庭での責任」では具体的に親と自分、勉強時間に関して述べている。宿題をこなし、良好な成績もキープしているなら、親は自分自身のスケジュールを決める責任を与える。このことは子どもにとって納得がいく。自分の家での勉強の結果がよければ、親はその責任を自分に任せると表現している。非常に具体的でおもしろい内容である。このことは社会に出て

も同様である。少しずつ仕事を任せられる状況から仕事に結果が出るようであれば、それを自分にすべて任せられる。このような疑似体験をここで学習させている。日本の教科書に記述はない。

小項目「学校での責任」では将来の責任を準備するために学校での責任が役に立つと述べている。ここでは宿題を例に出し、期限内に提出することは大人になり電気代を期限内に支払うことと同じように大切であるとしている。また、クラスメートを助けることが責任を示すことになる具体的な方法が書かれ、とても理解しやすく説得力がある。また、クラスメートを助けることが学校での責任を果たすことになり、友達の大切さを学ばせている記述になっていた。日本の教科書に記載はない。

(3) 大項目「自立すること」

大項目「自立すること」は小項目がない。思春期の目標の一つに自立した大人になることが挙げられている。自立を成し遂げた人は自分自身の行動に責任が持てる人である。責任を示す方法として二つ例を挙げている。一つ目は夏休みの仕事を時間通りに、一生懸命することである。二つ目はお金の管理をきちんとすることである。自立するためのノウハウが具体的に記載されており、説得力がある。日本の教科書に記載はない。

2) 第二章「あなたの個性」¹⁴⁾について

この章は大項目(1)「いかに個性が発達するか」(2)「自己概念」(3)「自己概念を向上させる」からなり、これらはそれぞれ小項目がある。日本教科書と比較し、表3に示した。

表3 アメリカ教科書 第二章「あなたの個性」と日本教科書の比較

	章	大項目	小項目	中学生の悩み、その解決方法	日本教科書 該当項目
アメリカ	第2章 「あなたの個性」	いかに個性が発達するか	環境	環境は家族と家、友達と学校、地域とその他で形成している。・家族はあなたの個性を形作る最も重要な環境である。他の誰よりも多くの時間を家族の一員として過ごしている。愛や思いやりや子どもへの関心の量が家庭での人格形成に影響を与える。・学校や友達が大きな役割を果たすのは子どもは家から離れて多くの時間を過ごしたときである。他の環境の因子（例えば、テレビやメディア等）がさらに重要になってくる。先生やコーチもまた個性の発達に大きな役割を果たす。友達やクラスメートとの関係は獲得した特徴に影響を与える。友達の好き嫌いはあなたの好き嫌いにもなる。あなたが友達と遊ぶという行動は生涯あなたにとって関心事となるかもしれない。・地域の人はあなたの獲得した特徴に影響を及ぼす。	なし
			個性を変えていくこと	自分自身について良い感じを持っている若い人は、一般的に最善を尽くしたいと思う。彼らは完璧ではなく、決して完璧になることはない知っている。彼らは短所を認識し、それらを変化させようとする。個性の特徴を変えることはできるが、これらの特徴を壊すことは難しい。個性を改良したり変えたいと思うことがあるかもしれないが、長い間培われてきた個性を変えることは簡単ではない。時間と努力が必要である。個性を変えたいと考えたときは、一つだけを選びなさい。一度に全てを変えようとしてはだめである。変えるためにどうしたらいいのか明確に書きなさい。最後に実行に移してあなたの計画を見直しなさい。	なし
		自己概念	ポジティブな概念・ネガティブな概念	自己概念とは自分自身をどう感じているかであり、個性の大切な一部であり接触する人から形成される。自己概念にはポジティブな自己概念とネガティブな自己概念がある。ポジティブな概念は自身に良い気持ちを与える人のことである。愛や認識や励ましを与えてくれる家族はポジティブな概念を成長させる基礎を形作る。子どもを励ましたりほめることはポジティブな概念を形作るのを助ける。一方、良い感じを与えない人々はネガティブな概念を持っている。ネガティブな概念を持っている人は彼らの欠点や失敗を気にする。	なし
		自己概念を向上させる	あなたの良い点を見なさい	あなたは弱点を持っており、皆が持っている。あなたはあなた自身を完璧するように期待してはいけない。弱点に集中しないようにして、代わりにそれを改良しようとしなさい。まるで、鏡を見るように自分自身を注意深く見なさい。あなたの良い点を書き記しなさい。	なし
			あなたと他の人を比較してはいけない	他の人、特に描かれたテレビやメディアの個性と比較してはいけない。あなた自身をあるがままに受け入れることを学びなさい。また、自分自身をよく見せようと他の人の失敗を探そうとしてはいけない。	なし

			賞賛を したり 受け入 れるこ とを学 びな さい	賞賛をすることは人の自己概念を創造する。他の人のいいところを探し、賞賛しなさい。それはお互いに気持ちのいいことである。時々、賞賛を得ることは賞賛することよりも難しい。人々はしばしばネガティブなコメントをしてしまうことがある。あなたが次の機会に改良することができる方法を書く心のノートを作りなさい。良い仕事をしたと受け入れようとしなさい。人があなたに賞賛を与えたときは感謝し、あなたの自己概念を引き上げる助言を認めなさい。	なし
			新しい 興味を 発達さ せな さい	新しい興味を発達させることによって、あなたは持っていた知らなかった才能を見つける機会を得ることができる。広い視野に立って新しい興味を発達させることは新しい能力を成長させたり学んだりする機会が与えられる。心を開いて、新しい興味を発達させる機会を利用しなさい。若い頃に始めた多くの趣味は人生を通して続けられていく。多くの興味を持てばますます自己概念を改良する機会も増えていく。	なし
			ポジ ティブ な態 度を 発達 させ な さい	自己概念を発達させるためにポジティブな態度を発達させなさい。あなたがポジティブな態度を持つときは友達あなたの周りにいることが楽しいだろう。ポジティブな態度を発達させるための一つの方法はポジティブな方法の中で自分の考えを表現することを学ぶことである。	HD-p59
			笑顔 と笑 いを 学 び な さい	笑顔でいることを学ぶことはネガティブな態度をポジティブな態度に変える最も効果的な方法である。本物の笑顔は顔の表情によって心から表れ、笑顔は伝わる。笑っているあなたを見て、誰もが笑わないのは不可能である。あなたは友達と一緒に笑うことができる。笑いは人生を楽しむためには大事なものであり、ポジティブな自己概念や良い個性のサインである。	なし
日本家 庭科 KT	なし	なし	なし	なし	なし
日本家 庭科 K	なし	なし	なし	なし	なし
日本保 健体 育 HD	第1章 「心身 の発達 と心の 健康」	心の健 康	心の健 康を保 つため には	心の健康な人は、自分の強さと弱さを、長所と短所を克服しようとして、前向きに努力している人だと言える。また、物事に対して、柔軟で広い視野を持つことやユーモアを持つことも心の健康にとって大切なことである。心と体の関係を理解して、ストレスに打ち勝つことが出来るたくましい心を育み、健康的に成長していこう。また、周りの人に対して、思いやりを持ち、協力し合って、誰もが心の健康を保てる世界を作る一員となるように努力しよう。	HD-p59
日本保 健体 育 HT	なし	なし	なし	なし	なし

(1) 大項目「いかに個性が発達するか」

大項目「いかに個性が発達するか」は「環境」、「個性を変えていくこと」の小項目から成り、順次見ていく。

小項目「環境」では「中学生が得た特徴は環境の結果によって発達する」と説明している。一つ目は家庭や家族であり、それは最も大切な環境であり、多くの時間を一緒に過ごしているものである。また、両親の愛が子どもの人間形成に影響を与える。二つ目は学校や友達であり、友人関係は獲得した特徴に影響を及ぼし、友達と一緒に遊ぶことは生涯の関心事になるかもしれない。三つ目の地域やその他では写真2-5¹⁴⁾「クラブのメンバーがお互いにポジティブな影響を持っているかもしれない」と説明されているようにクラブに参加することがお互いのポジティブな関係になると説明されている。日本の教科書に記載はなかった。

小項目「個性を変えていくこと」では中学生がなぜ個性を変えようとするのか、また、個性の特徴は変えることができるがそれを壊すことは難しいと説明している。それを受けて、個性を変えるための方法が具体的に書かれている。中学生は個性について悩む時期であり、具体的な解決方法が明確に示されていることは実用的である。しかし、日本の教科書には書かれていなかった。

(2) 大項目「自己概念」

大項目「自己概念」は小項目「ポジティブな概念・ネガティブな概念」から成っている。

小項目「ポジティブな概念・ネガティブな概念」では「自己概念とは個性の大切な一部であ

り、接触する人から形成される」と定義されている。ポジティブな概念を成長させる基礎は愛や励ましを与えてくれる家族であり、その方法として写真2-6¹⁴⁾では、子どもと父親が一緒にテニスをしており、子どもを励ましたり、ほめることでポジティブな概念を成長させている。一方、ネガティブ概念を持っている人とは「欠点や失敗を気にする」と書かれている。ポジティブな概念の形成には家族の中で親と子どもの関わり方が重要であり、家庭科教科書で扱うべき内容である。しかし、日本の教科書になかった。

(3) 大項目「自己概念を向上させる」

大項目「自己概念を向上させる」では「あなたの良い点を見なさい」「あなたと他の人を比較してはいけない」「賞賛をしたり受け入れることを学びなさい」「新しい興味を発達させなさい」「ポジティブな態度を発展させなさい」「笑顔と笑いを学びなさい」の小項目があり自己概念を向上させる方法が述べられている。

小項目「あなたの良い点を見なさい」では「まるで、鏡を見るように自分自身を注意深く見ることや、良い点を書きなさい」と書かれている。まず、自分自身のことを知ることが大切であり、誰にでも弱点があることを伝えている。中学生は失敗や弱点があることに悩み、これに集中してしまう時期である。しかし、ここでは自分自身の良い点を書き出すことを通して、自己を向上させている。しかし、日本の教科書にはなかった。

小項目「あなたと他の人を比較してはいけない」では「自分自身をあるがままに受け入れ、他の人と比較することで卑屈になってはいけない」と書かれている。中学生は他人と自分を比べたがる時期である。しかし、このようなことは意味がないことを認識させることで、個性の向上につながる。日本の教科書にはなかった。

小項目「賞賛をしたり受け入れることを学びなさい」では「他の人のいいところを探し、賞賛しなさい」と書かれている。中学生は第二次反抗期が始まるときでもあり、人からの意見を素直に受け入れることが難しい時期でもある。だからこそ、人のいいところに気づき、相手を褒める気持ちを持つことが大切である。日本の教科書にはない。

小項目「新しい興味を発達させなさい」では「広い視野に立って新しい興味を発展させることによって、知らなかった才能を見つけることができる」と書かれている。文部科学省「完全学校週5日制の実施に伴う事業の実施・子どもたちの参加状況に関する調査」¹⁾によると、中学生は、休日にテレビを見たり、ゲームをして過ごしている。このような興味は発展させることはできないし、受動的である。ここでは、発展的で能動的な活動が必要であり、その興味が多くなれば自己概念も発達していく。日本の教科書には書かれていなかった。

小項目「ポジティブな態度を発展させなさい」では「ポジティブな態度を持つと友達はあるあなたの周りにいることが楽しいだろう」と書かれている。自分の周りで起こったトラブルをポジティブに、建設的に捉えてこそ友人が集まると述べている。日本の家庭科にはなかったが、保健体育HDにはあった。保健体育HD第1章「心身の発達と心の健康」の小項目「心の健康を保つために」では、心の健康な人は前向きに努力している人である」とあり、具体的解決方法として、「柔軟で広い視野、ユーモアの必要性」などが書かれていた。これは中学生に役立つ。さらに、「心の健康な人は周りから好感される」の記述があれば、他者との関わりの観点からこの必要性がさらに理解できる。

小項目「笑顔と笑いを学びなさい」では「ネガティブな態度をポジティブな態度に変える最も効果的な方法であり、本物の笑顔は顔の表情によって心から表れ、笑顔は伝わり、笑いは人生を楽しむためには大事なもの」と書かれている。写真2-10¹⁴⁾は、「この少女の笑顔

は彼女のポジティブな自己概念を表している」と説明されている。笑顔でいることの良い面を学習させている。中学生とは感情を表に出すことができない時期である。このような学習が必要ではないだろうかと考えられる。日本の教科書にはない。

3) 第三章「あなたが直面している変化」¹⁵⁾ について

この章は大項目(1)「批評」(2)「ストレス」(3)「危機」からなり、これらはそれぞれ小項目がある。日本教科書と比較し、表4に示した。

表4 アメリカ教科書 第三章「あなたが直面している変化」と日本教科書の比較

	章	大項目	小項目	中学生の悩み、その解決方法	日本教科書 該当項目
アメリカ	第3章 「あなたが 直面して いる変 化」	批評	批評の 形	批評には有害な批評と建設的な批評がある。有害な批評は助けにならず、友達を傷つけたり、人の自尊心を壊していく。友達からの建設的な批評はあなたが良い人間になるために役立てることができる。	なし
			批評を 処理す ること	批評を処理することによって、あなたは感情や批判からのメリットを管理することができる。誰があなたへ批評しているのかを自身に尋ねなさい。あなたを心配している人からの批評はあなたが良い人間になってほしいという建設的なものである。批評を要求するならば、どのような批評であっても、喜んで意見を受け入れなさい。注意深く批評を聞きなさい。批評が意味することを理解する必要があるし、批評されているのだから好かれていないと感じてはいけない。	なし
			批評を 与える こと	批評を上手に与えることは批評を受け入れることよりも難しいことがある。人を傷つけることなしに建設的な批評をしようとするべきである。これは気を配り注意深く言葉を選ぶ必要がある。	なし
	ストレ ス		ストレ スが体 に与え る反応	ストレスは人はそれぞれ違うので感じ方も違う。ストレスによる体の反応の多くは制御できなく、心臓は早く動き、呼吸や脈が早くなり、筋肉は硬直し、口が渇き、胃が締め付けられているように感じる。ストレスには元に戻るものと続くものがあり、後者は頭痛・胃痛・心の病気・高血圧等を引き起こす。	HD-p56 HT-p49
			ストレ スを避 ける方 法	ストレスを避ける方法は三つある。第一に、生じているストレスを生活の中の出来事を確認しなさい。一度にあまり多くの変化を作らないようにしなさい。第二に、計画を立てることによっていくらかのストレスは避けることができる。例えば試験の前に勉強の計画を立てたならば、前日に睡眠をとることができる。第三に、多すぎるストレスを避け、自分の限界を知りなさい。あなたが処理できない場合はノーと言えるようになりなさい。健康と調整を保つことによって、あなたは毎日のストレスを処理することができる。安らげる時間を見つけなさい。	なし
			ストレ スを処 理する 方法	ストレスは処理する方法は四つある。一つ目は信用している友達や家族や尊敬している誰かに話をすることである。二つ目はあなたがどのように感じたかを心を開いて話しなさい。泣くことでさえも感情を落ち着かせることがある。三つ目は問題に直面したときは、理由を見つけようと思ったらその問題が解決できるかを決めなさい。四つ目は運動をして感情を取り除くことである。また、あなたが楽しめる趣味を発展させて、リラックスしなさい。例えば、穏やかな音楽を聞くことや浴槽につかることはあなたの神経を和らげ、落ち着かせることができる。	HD-p57 HT-p50
	危機		財政的 危機	財政的危機は多くの家族が時々直面する問題である。例えば、失業や滞納が払えなくなることや深刻な病気や死などである。財政的危機に瀕したときは、家族全員にそのことを知らせ、その問題を解決する方法を見つけなければならない。家族が危機を一緒に解決するようになれば、不安や恐れも減る。一緒に取り組み、ポジティブな態度を保ちなさい。また、財政の危機は家族を近づけ、問題を一緒に解決することで新しい親密感を発展させるかもしれない。	KT-p174 KK-p166
			セク シャル ハラ スマ ン ト	セクシャルハラスメントは喜ばない性的な発言や好意を要求することであり、学校や職場でも見られる。セクシャルハラスメントは深刻な問題であり、もし被害者になったときは、やめるように嫌だと言うことを伝え、続けるようならば信用できる人に助けを呼ぶか、両親やカウンセラーや管理者に話しなさい。	なし
			離婚	離婚は結婚の法的な終わりのことであり、アメリカでは多い。離婚を決定した二人は、家族に影響を与え、何ヶ月・何年とこの危機が続き、みんなが厳しい時間になる。子どもは、恐れ、怒り、憂鬱、罪悪感が混合し、小さい子どもは何が起こったのかわからない。このような新しい状況に適応するために家族が一緒に取り組むことで、親密になることができる。	なし
			死	若者の間で自殺は主要な死因である。何人かの若い人は成功への圧力に耐えられなかったり、親密な関係が壊れたときや家庭での不和が莫大なストレスとなり、出口を探そうとして自殺を考える。自殺を相談されたら無視せず、じっくり話を聞いてあげなさい。そして両親やほかの関係した大人に相談したり、地域の専門の人に電話をしてカウンセリングしてもらいなさい。	なし

			個人的な危機	財政の危機・離婚・死を知っているかもしれないが、これらの問題は十代の人自身にはあまり起こらない。しかし、十代の人自身は自分自身の個人的な危機（暴力・アルコール・ドラッグ・計画しない妊娠）に直面する。暴力は他の人に害を与える行動である。十代は多くの違った状況の暴力に直面する。例えば、家庭内暴力、つきあっている異性からの暴力、ギャング暴力等である。家庭内暴力には、子どもが両親の暴力を見て暴力を振るうことがある。暴力を振るう子どもは、暴力のサイクルを繰り返して家族のメンバーを虐待する大人になるかもしれない。つきあっている異性からの暴力は身体的な暴力の上に、感情の虐待を含む。あなたが彼氏、彼女にこの暴力を振るわれたときは、両親やカウンセラーに話さない。ギャング暴力は、多くの人にとって成長の関心事である。家にとどまる人や逃げようとする人、そしてアルコールやドラッグに逃げる人がいる。たくさんの可能な手助けの源があり、両親に話せないなら他の大人に話したり、先生やスクールカウンセラーや信用しているリーダーなどが助けをくれたり、専用の電話をすることで助かる。そして、とにかく誰かに話をしなさい。本当に必要なときは助けを呼びなさい。	HD-p126 HT-p111
日本家庭科KT	第9章「私たちと家族、地域」	よりよい家族関係を考えよう	家族のつながり	家族がつながりを強めるためには、お互いにそれぞれの立場を理解し、相手の気持ちを尊重することが大切である。家族の病気や事故などの家族に起こる変化が、家族のつながりを一層強くする場合もある。よりよい家族関係を作るために、私たちも家族の一員として、努力や工夫をしてみよう。	KT-p174
日本家庭科KK	第8章「私と家族・家庭と地域」	私と家庭生活	よりよい家族関係を作る	生活を共にしている家族は、気持ちが通じ合い、遠慮しないでつきあえる関係であることが多いが、いつも穏やかで和やかな関係であるわけではない。時には意見が対立したり、けんかしたり、互いを嫌いになることもある。特に、生活上の危機に会ったり、誰かが病気をしたり、誰かの気持ちが不安定になったりなど、様々な生活上の問題が起こったときには家族関係に影響を与えることもある。そのときには、家族で話し合ったり助け合ったりしていくが、親戚の人や、友人や地域の人たちや相談所の人々など、家族以外の人に助けをもらうことも必要である。	KK-p166
日本保健体育HD	第1章「心身の発達と心の健康」	心の健康	ストレスをもたらすもの	ストレスをもたらす要因をストレスラーという。ストレスには、思春期の急激な身体的変化によるもの、多忙な学校生活によるもの、人間関係によるものがある。ストレスの程度はストレスラーへの対処の仕方である。	HD-p56
			ストレスを感じたときは	ストレスを感じているときは、スポーツや音楽、おしゃべりなど、自分が無心になって楽しめる活動に打ち込んだり、親や先生、友達に相談すると良い。ストレスを和らげたり解消する方法はいろいろある。その中から自分にあった方法を見つけることが大切である。	HD-p57
	第4章「健康な生活と病気の予防」	喫煙・飲酒・薬物乱用の害	喫煙・飲酒・薬物乱用をしないために	薬物を乱用し始めるきっかけは様々であるが、最もありふれたきっかけは、友達に誘われたり、好奇心からである。周りの人から進められたときにはきっぱり「ノー」と言い切る必要がある。また、断れなかったり、判断に迷ったときは周りの大人に相談しなさい。	HD-p126
日本保健体育HT	第1章「心身の発達と心の健康」	心の健康	欲求やストレスへの対処と心の健康	欲求が複雑に発達するほど、欲求不満もおき、ストレスの原因（例えば、勉強がはかどらない、友人とうまくいかない等）になることがある。誰でもこのような経験をする。大切なことはストレスをためないように、他人に迷惑をかけずに自分で工夫して解消したり、ゆとりを持って心豊かな生活ができるよう心掛けることである。	HT-p49
			ストレスとの付き合い方	ストレスへの対処	ストレスへの対処法は3つある。1) 適切な状況判断をする。2) 前向きに問題解決を目指す。3) 不快な感情を上手く処理する。状況や問題の性質、本人の気持ちなどによって、対処方法を使い分けることが大切である。
	第4章「健康な生活と病気の予防」	喫煙・飲酒・薬物乱用の健康	薬物乱用防止	乱用のきっかけは、友人に誘われたり、面白そうだという好奇心や仲間はずれになりたくないから等である。単に薬物乱用がもたらす悪影響について学習するだけでは、必ずしも健康的な行動選択に結びつかない。友人の誘いに対して、きっぱりと断る態度が大切である。	HT-p111

(1) 大項目「批評」

大項目「批評」は小項目「批評の形」、「批評の処理」、「批評を与えること」から成っている。

小項目「批評の形」では友達を傷つけたり、人の自尊心を壊していく有害な批評と、人を改良することができる建設的な批評とがある。友人関係と建設的な批評について写真3-2¹⁵⁾がある。そこでは、「友達からの建設的な批評は、あなたが良い人間になるために役立つこ

とができる」と説明されている。日本の教科書にはない。

小項目「批評の処理」では「批評を処理することによって、感情や批評からのメリットを管理することができる」と書かれている。中学生に限らず人は誰でも批評されることに対して良い感情を持たないが、自分を心配してくれる人からの批評は喜んで受け入れるべきであり、批評について吟味することが重要であると書かれている。日本の教科書にはない。

小項目「批評を与えること」では「人を傷つけることなしに建設的な批評をするべきである」と書かれている。そこでは、気を配り、言葉を選ぶことが必要であり、写真3-3¹⁵⁾では、このことを学ぶ役割としてグループの仲間が必要であることを示している。そこでは「グループの仲間は批評を受けることや与えることを許すことができる必要がある」と説明されている。日本の教科書にはない。

(2) 大項目「ストレス」

大項目「ストレス」では小項目「ストレスが体に与える反応」、「ストレスを避ける方法」、「ストレスと処理する方法」から成っている。

小項目「ストレスが体に与える反応」では「ストレスには元に戻るものと続くものがあり、後者は頭痛・胃痛・心の病気・高血圧等を引き起こす」とあり、ストレスが体に与える反応の症状が具体的に示されている。中学生は受験や友達関係などストレスを感じることもある。このような症状が示されていれば、自分のストレスが深刻な問題であると気づくことができる。日本の家庭科にはなかった。保健体育HDでは「ストレスには、思春期の急激な身体的変化によるもの、多忙な学校生活によるもの、人間関係によるものがある。ストレスの程度はストレスサーへの対処の仕方で異なる」と記載され、保健体育HTでは「欲求不満がストレスの原因になり、誰でもこのような経験をする。ストレスをためないように、他人に迷惑をかけずに自分で工夫して解消したり、ゆとりを持って心豊かな生活ができるよう心掛けることである」と書かれている。しかし、具体的な症状は示されておらず、自分の症状がストレスによるものかどうかを判断できない。

小項目「ストレスを避ける方法」ではストレスの要因の確認や計画を立てることや自分の限界を知ることなどが書かれている。小川のせせらぎを聞きながら中学生が考えている姿が写真3-5¹⁵⁾にある。そこでは、「時々、状況を熟考する時間をとることはストレスをコントロールすることに役立つ」と示されている。このような解決方法を具体的に示すことは中学生にとって有益である。しかし、日本の教科書にはない。

小項目「ストレスを処理する方法」では四つの具体的な方法を示している。一つ目は友達や家族と話しをすること、二つ目は感情を落ち着かせること、三つ目は理由を見つけること、四つ目はリラックスすることである。一人だけで解決するのではなく、友人や家族と話すことによって解決していくことが非常に重要である。東京都福祉局子ども家庭部企画課「最近の思春期児童の行動に関する専門家会議報告書」²⁾の中で、「キレる子現象」が説明されている。この現象とは、ストレスを感じた思春期の生徒が些細なことでも自分を抑制できずに衝動的に問題行動を起こすことである。友人や家族に相談することを学習すればこのような問題行動は防げるものだと考えられる。日本の家庭科にはなかった。保健体育HTでは具体的ではなく、一方、保健体育HDは「スポーツ・音楽・おしゃべり等自分が無心になって楽しめる活動に打ち込んだり、親や先生や友達に相談するのもよい」とあり、アメリカの教科書と同様の内容が記述されていた。ストレスに対する対処法は家庭科では学ぶことができず、保健体育でしか学ばざるを得ない。

(3) 大項目「危機」

大項目「危機」では小項目「財政的危機」、「セクシャルハラスメント」、「離婚」、「死」、「個人的な危機」から成っている。

小項目「財政的危機」では「財政的危機が生じたときには、家族全員にそのことを知らせ、一緒に解決策を探さなければならない。財政的危機を家族みんなで乗り越えることによって家族の親密感を発展させることにもなり得る」と書かれている。日本の家庭科KTでは、第9章「私たちと家族、地域」の小項目「家族のつながり」において、「家族の病気や事故などが、家族のつながりを一層強くする場合がある」とある。そこに、財政的な危機について加えてもよい。日本の家庭科KKでは、第8章「私と家族・家庭と地域」の小項目「よりよい家族関係を作る」において、「様々な生活上の問題が起こったときには家族関係に影響を与える。そのときには、家族で話し合ったり、助け合ったりしていく」とある。ここでも財政的危機について具体的に示し、家族のつながりを一層強くする効果を記述した方がよい。写真3-7¹⁵⁾は、中学生がゴミ処理の仕事をしている写真である。そこでは「アルバイトをすることによって、財政的危機時に家族を助けることができる」と説明されている。日本の教科書にはなかった。

小項目「セクシャルハラスメント」では「セクシャルハラスメントは重大な問題であり、もし被害者になったときにやめるように嫌だということを伝え、続けるようならば信用できる人に助けを呼ぶか、両親やカウンセラーや管理者に話すこと」が挙げられている。日本の教科書にはなかった。セクシャルハラスメントは日本の社会の中でも多い事件である。このことを中学生に知らせることは重要である。

小項目「離婚」では「家族に影響を与えみんなが厳しい時間になり、離婚によって発生した新しい状況に適応するために家族の協力が必要である」と書かれている。離婚については、内閣府国民生活局総務課「国民生活白書」³⁾の中で、「他の先進諸国における離婚率と比較すると、我が国は依然として比較的低いものの、他の国々が近年あまり大きな変化がない中で、その上昇幅の大きさが目立っている」と報告され、離婚率が上昇している日本でも、アメリカと同様に家庭科教科書に記述すべきだと考えられる。

小項目「死」では「若者の間では自殺は主要な死因であり、家族での不和がストレスとなり自殺となる。自殺を相談されたなら、じっくり話を聞いてあげなさい」とある。日本の教科書にはなかった。中学生の自殺は、文部科学省「生徒指導上の諸問題の現状について」⁴⁾の中で、減少傾向にあるが依然続いており、原因別では「家庭事情」が最も多いと報告されている。自殺についての学習を家族関係とリンクさせて、日本の家庭科でも行う必要があると考えられる。

小項目「個人的な危機」では「財政的危機・離婚・死は十代の人には知っているがこれらの問題は十代の人自身にはあまり起こらない。しかし、十代の人自身は自分自身の個人的な危機(暴力・アルコール・ドラッグ・計画しない妊娠)に直面する」と書かれている。写真3-9¹⁵⁾は、個人的な危機に直面した中学生が相談を受けている。そこでは「教師やカウンセラーのような大人が十代の個人的な危機を助ける」と説明されている。日本の家庭科にはなかったが、保健体育にはあった。保健体育HDでは、「薬物乱用をはじめのきっかけは友達である。対処法として、きっぱり断ることや大人に相談することである」とあった。保健体育HTも同様の内容があった。中学生に人間関係を構築するのに友達は欠かせない。しかし、そこから発生する問題を具体的に提示し、その解決策を示すことが日本の家庭科教科書に必要である。

IV おわりに

今回の分析結果で、精神的機能の割合について、アメリカは43.4%、日本K Tは39.8%、日本K Kは41.6%であり、アメリカの方が精神的機能の割合が多いことがわかった。内容の比較について、日本の家庭科は家族の一員として努力や工夫をしてみようなど、具体的な解決方法は少なかった。思春期の発達に関する記述は日本の家庭科になく、保健体育にあったが、定義的記述だった。日本の家庭科は自分が将来親になったときの視点では書かれておらず、実用的に役立ちにくいと考えられる。日本の家庭科は章立てにおいて、保育に「家族の役割」、家族関係に「子どもと家族」のように、二つにまたがって「家族」が記述され、系統性がなかった。日本の家庭科・保健体育はコミュニケーションについて触れられていなかった。さらに、日本の家庭科は死・暴力・離婚など、今日の日本が抱えている問題に対する記述がなく、生徒はこれらの問題を学習することなしに義務教育を終えてしまうことになる。

以上のことから、アメリカ教科書は日本の教科書に比べ、人間関係・家族関係に関して、実用書として活用しやすく構成されていることがわかった。

日本の抱えている問題に対する理解と対応できる方法を学習するために、日本の家庭科教科書は以下のようにすべきであると考えた。

- 1) 問題に対する具体的解決方法を示す。
- 2) 家族関係・人間関係を家庭科の教科書に集約し、網羅させる。
- 3) 中学生が親になったときに活用できるように、親の視点から記述する。
- 4) 内容を理解しやすいように、系統的・体系的な章・単元・文章の組み立てにする。
- 5) 暴力や離婚などの今日的な課題を取り上げ、それに対応できる内容にする。

今日の学習指導要領は、「心」の教育⁶⁾の必要性が叫ばれている。中学生に生じる悩み、その解決を学習させていくことは今日の日本の社会にとって急務であり、これを扱う教科として家庭科がある。それには上述してきた家族問題を子どもとして親としてどう解決していくかを具体的に考えさせるような教材開発が今後ますます重要になってくると考えられる。

参考文献

- 1) 文部科学省「完全学校週5日制の実施に伴う事業の実施・子どもたちの参加状況に関する調査」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/week/021001.ht
- 2) 東京都福祉局子ども家庭部企画課「最近の思春期児童の行動に関する専門家会議報告書」
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/KONDAN/1998/11/408BG200.HTM>
- 3) 内閣府国民生活局総務課「国民生活白書」
<http://www5.cao.go.jp/j-j/wp-pl/wp-pl01/index.html>
- 4) 文部科学省「生徒指導上の諸問題の現状について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/12/03121902.htm
- 5) 文部科学省昭和22年学習指導要領「はじめのことば」
<http://nierdb.nier.go.jp/db/cofs/s22ejh/index.htm>
- 6) 中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/970801.htm
- 7) L A.Liddell & Y S.Gentzler「Building Life Skills」(2003) THE DOODHEART-

WILLCOMPANY, INC

- 8) 石田晴久ら「新しい技術・家庭（家庭分野）」(2003) 東京書籍
- 9) 中間美砂子ら「技術・家庭（家庭分野）」(2003) 開隆堂
- 10) 宇土正彦ら「中学校保健体育」(2003) 大日本図書
- 11) 高橋健夫ら「新しい保健体育」(2003) 東京書籍
- 12) 中央教育審議会「新しい時代を拓く心を育てるために」一次世代を育てる心を失う危機—
「幼児期からの心の教育の在り方について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/980601.htm
- 13) 7) pp.15-24
- 14) 7) pp.25-34
- 15) 7) pp.35-45